

わびの心境：西鶴の好色一代男出版二百五十年目に際して

小島，吉雄
九州帝國大學法文學部國文學研究室助教授

<https://doi.org/10.15017/10587>

出版情報：九大國文學. 2, pp.108-112, 1931-10-05. 九大國文學研究會
バージョン：
権利関係：

わ び の 心 境 小 島 吉 雄

——西鶴の好色一代男出版二百五十年目に際して——

今年には西鶴が好色一代男を出版してから二百五十年目にあたるといふので、大阪や東京では展覽會その他色々催しがあつた。

一體、西鶴の小説は、甚だ猥褻なやうに思はれてをり殊に一代男などといへばエロの總本山のやうに考へられてゐる。此の春も口語譯西鶴全集といふが出るについて、大阪あたりでは素晴らしい洋装をしたモダンガールに煽情的な宣傳マツチを街頭で配布させたといふ事をきいたが、これなどは、かういふ宣傳法が西鶴にふさはしいといふ本屋のさかしらであらうが、西鶴は恐らく墓の中心で微笑してゐることだらうと考へる。わたくしは西鶴の作品には、もつと眞剣なものが、もつと眞面目なものが存在してゐると思ふのである。その點に就いて、漫談

風に話してみようと思ふ。

西鶴の一代男が近世小説の開基であるといふことは申すまでもない。徳川時代の小説といふものは、この一代男によつて、その面目を一新し、これ以前とこれ以後との間にはつきりと一線を劃することになるのであるが、しかしながら、よく觀察してみるといふと、蔘かぬ種は生へぬ道理で、西鶴の作品も突然無から有を生じたのではなく、一代男が生れてくるには、やはりそれだけの種があつたのである。従つて、一代男の中を注意ぶかく檢べてみると、色々一代男以前の書物の影響が発見出来るのである。それらに就いては既に諸先輩方の研究もあることである。ただ西鶴の偉い點は、色々なものゝ影響をうけてゐながら、それを全く自家薬籠中のものとして

全く違つた感じのものを、西鶴の個性の極めて強烈な獨
自的なものを作りあげてゐる點である。試みに好色一代
男にあらはれたる西鶴の獨自性をあぐれば次のやうなも
のであるだらう。

今までの役者や遊女の評判記類は一つの小説といふ事
が出来ない。一代男はかういふ小説でないものから脱化
して小説をつくりあげた、即ち西鶴は見事な説話的構成
を示した。これが第一に西鶴の偉いところである。説話
的構成の必要上、一代男には事實の潤色がある。寫實が
中心であるが、その寫實の中に適當な誇張が入つてゐ
る。それもユーモラスに入つてゐるので、比較的不自然
味を感じさせない、これも西鶴のよろしいところであ
る。西鶴はまた、物語的筋をつくりあげるに、源氏物語
とか伊勢物語とかいふやうな昔の小説のまねをしてゐ
る。しかし、此れがまた非常に自然に適切に行はれてゐ
て何とも言へぬ妙味を帯びてゐる。これもまた西鶴のい
ふ所である。

次に、西鶴は、一つの出來事をのべるのに、その事件

わびの心境

の本筋よりもその事件の背景の爲に三分の二の筆を費し
てゐる。かういふやり方は西鶴頃の小説にはなかつた事
で、かういふ背景描寫の爲にわれわれに人生といふもの
をしみじみと味はさせる。これがまた一つの特色をなし
てゐる。それから、も一つ申したい事は、その文章の特
異性である。西鶴の文章は遊女評判記などの影響を蒙つ
てゐるが、それよりもつと多彩で、もつと簡結で、力
強く複雑な内容情趣を一言のうちに言ひあらはしてゐる
妙味は實にすばらしいものであるが此れは彼の俳諧師と
しての教養から來てゐるので、俳諧連句の句法を散文に
應用し、而も、つれづれ草や伊勢物語などの文章を自由
自在に應用して出來あがつてゐる。これがまた他の者の
まね難い點である。

以上は一代男について見たのであるが、その大部分
は、また西鶴の他の作品についても言はれ得ることだと
思ふ。

ところで、西鶴の短所として、「西鶴は長篇作家では
ない、短篇には秀でた腕をもつてゐるけれども長いもの

になると前後一貫した筋をもつてゐない」といふ事が屢言はれる。なるほど、西鶴の作品を見ると、長篇的結構に乏しい憾がある。再び例を一代男にとつてみれば、その八卷五十四章の相互の間に緊密な連絡がなく、ただ世之介といふ一人の男の行動といふ點だけで結びあはされてゐるだけである。然らば、それは純粹の短篇集かといふと、さうでもない、全躰を源氏五十四帖になぞらへて一つのまとまつたものを構成しようといふ意圖は明かである。加之、一代男には、主人公の心理といふものが全然描かれてゐない。主人公の個性といふものも少しも出てゐない。だから、小説といふものに脚色の緊密さと個性描寫とを要求する人にとつては此の一代男は少し物足りぬのであつて、そこで、西鶴の短所がこれらの點にあるかのやうに言はれるのである。が、しかし、自分は、これをもつて西鶴の短所だとは思ひたくない。西鶴にとつては、人物とか筋とかは決して第一義的なものではなかつたやうだ。彼は、その作品の中で、ただ人生の侘びしさを物語らうとしてゐるのであつて、人物や筋は、た

だこの人生の侘びしさを物語る方便にすぎない。言ひかへれば、彼は、或る人物、ある筋をかりて、彼の人生に於ける侘しい心境をさへあらはせるならば、それでいいので、深く人物や筋に拘泥する必要がない。かういふのが、西鶴の小説、殊に一代男や、一代女のやうなものの持味ではないかと思ふのである。すなはち、一代男のやうなものは一種の心境小説であると言へば言ひ得るものだと思ふのである。そして、その心境たるや、これを、「侘び」といふ言葉で言ひあらはすにふさはしいと思ふのである。

茶道要録といふ書物に、「侘之字之事、音啓、侘僚ト續キ、志ヲ失フノ貌トテ、我心之行ニ任セズ、事不足ヲ云フ、離騷ノ注ニ、侘、立也、僚、住也、憂思失意、住立而不能前也ト云ヘリ」とあつて、侘即ちわびといふ字は自分のおもふままにならないうことだと言つてゐる。元來、我が國語に於ても、わびといふ語は、惱みくるしむ意味に使つたもので、物事の不如意を示す言葉である。茶道でいふ侘は、此の物事が意の如くならないとこ

ろからして人生逃避的になつた哲學的心境をいふのであるが、わたくしのいふ西鶴の侘びの心境もやはり此の茶の湯の方の心境に類似したもので、なやみの人生の姿を諦視してゐるうちに、おのづから開けてくる諦念の世界、それが侘の世界である。一種のさとりであり、夏目漱石のいはゆる非人情の世界である。即ち、此の侘びの心境に徹するといふと、ここに繪畫を鑑賞するやうな餘裕ある氣持で自分を、そして自分の周囲を眺めることが出来る。さういふ氣持で眺められた言ひかへれば非人情の世界から眺めた此の人生といふものは、如何になやみ多く而してわびしすぎる事か、そこには一種のさびしい感情までもわきあがつてくるのである。畢竟するに、かういふ人生に對して働きかけるわびの心境、そして、そこに湧上る複雑な寂寥感、これが、西鶴の作品を貫通してゐるものである。わたくしたちが、今日西鶴の作品を見て、しみじみした感じに打たれるのは、蓋し此のためである。

では、西鶴は、どうして、かういふ心境を躰して來た

わびの心境

かといふと、これは西鶴が長年の間の俳諧師としての修業が、ここまで彼を高めたものと考へられる。言はば、此の侘びの境地は、たしかに、俳諧的な境地である。元來、俳諧といふものは、連歌に脈を引いてゐる。連歌は南北朝から室町にかけて發達したもので、心敬とか宗祇とかいふ人達がその連歌精神といふものを確立した。此の連歌精神といふのが、丁度茶の湯の精神とその根本に於て相一致するものであつて、所謂侘びといひ幽玄といふものがこれである。俳諧はこれらの精神を受け

ついで來てゐる。西鶴は俳諧の道にたづさはつてゐる間に、自然と此精神を躰得することになつた。更に言へば人生とか人間とかいふものに對する態度を此の俳諧によつて教へられた。そこから西鶴の侘の心境が生れて來たのである。俳諧といへば、われわれは直ぐ芭蕉を思ひ出す芭蕉俳諧の根本は寂びであるが、この芭蕉の寂びと西鶴の侘びとの間には共通なものがある。第一その俳諧精神に出發してゐるといふこと、第二生活態度の根本が同一点に歸着するといふ事、第三どちらも非人情の世界を

目ざしてゐるといふ事など皆相一致してゐる。だが、兩者の相違は、西鶴が自ら人間世界に非人情を求めたのに對して、芭蕉は自然界にそれを求めた點にあるのではないかと思ふ。従つて西鶴には人間臭があり、芭蕉には自然臭がある。やがてまたこれが、侘の心境と寂びの心境との相違であつたのである。西鶴は都會人だつた、芭蕉は田舎者だつた、此の兩者の稟質の相違がかういふ結果を生んだものであらう。

西鶴の一代男は畢竟、色慾世界を通じて侘びの心境を表現したものである。續いて出てくる二代男、一代女などに至ると、よほどその色慾描寫が哲學的になつてゐる。すなはち西鶴は色慾世界を通じてその侘びの心境を描くことはつきり意識的に企圖して來た模様である。

西鶴の色慾描寫は、その色慾を寫すのが第一目的でないから、その描寫が非常に淡泊であり、世間で考へられてゐるほど、煽情的ではないのである。これを西鶴にまねて出て來た他の作家の作品と比べると一層はつきりする。西鶴以後の作家は色慾描寫の興味に引きずられてゐるか、でなければ色慾世界に耽奇的な眼をかがやかせてゐるために、煽情的要素が實に濃厚である。

西鶴がその晩年になるに従ひ、その題材を廣く都會生活のあらゆる方面に求めたのも、つまり、侘びの境地を描かうとする彼としては當然のことと言はなければならぬと思ふ。

(これは、通俗を旨とする講演の要綱である。そのつもりで讀まれたい。)